

前日の雨もあがって快晴。若者で賑わっていたモーターショーも中盤を迎えて落ち着きを取り戻したのが、背広姿の中高年を始め幅広い層の来場者が目立つようになってきた。場内では国産、外国コーナーを問わずフロアに並べられ、直接“乗って触れる”ニューモデルに興味を示す若者や家族連れが多く見られた。

“心を動かす” ブランド戦略を展開



この春からグローバルブランドとして「MAZDA」の再構築に取り組んでおり、東京モーターショーをその活動の原点に位置づけている。ブースでの基本コンセプトは、ブランドイメージでもある「心を動かす新発想」。マツダの頭文字“M”をウィングで表現したシンボルマークと共に印象づけていた。

参考出品車は、あえて4モデルに絞り込んで開発陣が総力を結集したツブ揃い。メインステージには新世代ロータリーエンジン(RE)を搭載したスポーツカー「RX-エボルブ」と、新型SUVの「アクティビークル・コンセプト」を展示、ダンスパフォーマンスも交えて来場者を魅きつけている。

マツダの大きな技術バックボーンであるREを一段と洗練して搭載した「RX-エボルブ」は、室内も大人4人の快適空間を確保したユニークな4ドアスポーツ。新REは、自然吸気式にすることで軽量・コンパクトに仕上げ、アイドリング時から運転全域に至るまで燃費改善を図った。吸気ポートの改良などにより、最高出力は280馬力に及ぶ。そうしたエンジンスペックについて、若者から中高年まで幅広い層の男性が質問を投げかけている。



新世紀へ新しいスポーツカーを提案した「RX-EVOLV」



来年後半に発売予定の「アクティビークル・コンセプト」



カジュアルさが受けて女性から人気の「ネオスペース」

一方の「アクティビークル・コンセプト」(V6型3リッター)は、来年後半に発売予定であり、係員は来場者の反響把握にも努めていた。

参考出品のなかで女性から高い支持を受けているのが次世代コンパクトの「ネオスペース」(1.5リッター直噴ガソリン)。センターピラーのない観音開きドアが思い切った開放感を演出する。また、高級セダンのテイストを持ちながらSUVの機能性も融合したコンセプトモデル「ネクストアラ」は、個性という面からMAZDAブランドをアピール。

市販車の中では、今年6月に全面改良したミニバン「MPV」が一番人気で、年内に投入される4WDの展示モデルを確認する来場者が多い。燃料電池自動車は、フォードを通じてバラード社などによる共同体に参加しているが、今回は試験走行に使用している「デミオ FCEV」の現車を展示していた。

外国人記者の目(第4回)電気自動車などテクノロジーに驚嘆 ユタロン・コムルミス(タイ)

Jaturont Komolmis
グランプリ・インターナショナル・グループ副社長(バンコク)
Grandprix International Group Vice president (BangKok)

スポーツカーやオフロードカーなど5つの自動車雑誌を発行している。グランプリマガジンは30年の歴史があり部数も5万部を超えている。

東京モーターショーは5回目の取材だが、レイアウトやブースの展示方法といい来るときにドンドン良くなっている。今回目立ったのはやはりコンセプトカーや電気自動車。テクノロジーに裏付けされた新しい車がたくさん展示されているのに驚嘆した。各ブースでの英語による情報提供も良くなって取材しやすい。プレスセンターも役立っていいね。



オシャレ感覚が女性に人気 プジョー

10年ぶりに生まれ変わったのが、プジョーのフラッグシップセダン「607」だ。従来の手堅いイメージをがらりと変えて、流れるラインと個性あふれるフロント/リアエンドの処理は、インテリアの高級感覚と調和して、来場者を魅了していた。

発売以来高い人気を保持しつづけている「206」も見逃すことは出来ない。「206 WRC仕様」と、「206」ベースのデザインスタディ（近い将来発売予定）である「20♡（トゥ・オー・ハート）」も展示されているが、観客の滞在時間は長い。

特にプジョーのブースは女性の来場者が目につくのが特徴で、フランス仕込みのオシャレ感覚とフレンチライオンが象徴するスポーツ性が、着実にプジョーファンを増やしている印象を受けた。



これどう読むの？という声が多かった「20♡」

身近になったジャガーブランド ジャガー



Dタイプの「再臨」、XK180」

フォードブースに隣接し、フォードグループの一員であることを示しつつ、孤高の輝きを放つのがジャガーブースである。高級ミディアムサルーン「ニュージャガーSタイプ」は、すでに日本でも販売が開始されており、ショーでこの車を見ようと訪れる人が多かったようだ。

人気は、日本に初登場した「XKR」ベースのコンセプトカー「XK180」大幅に短かくした全長に450馬力のエンジン、プッシュボタン式5速ギアセレクター、20インチホイールで武装した、まさしく「レーシングジャガーDタイプ」の復活である。販売が計画されていないのが残念という声があちこちで聞かれる。

とにかく「ニュージャガーSタイプ」の登場で伝統的高级車「ジャガーブランド」も身近な存在になってきた。そんなところにオールドファンはもちろん、若い世代の来場者を惹きつけていたようだ。



フロント周りが微妙に異なる
911ターボ(上)とボクスターS(下)

世代を超えた人々で賑わう ポルシェ

いつも大勢の人が集まっているのがポルシェのブース。展示車は全車ラピスブルーに統一され、ここには老若男女あらゆる世代の来場者が集まり、ポルシェが世代を超えて注目されていることが良くわかる。

話題の中心はフラッグシップ「911ターボ」。97年に水冷モデル996型に代わって以来、4WD、カブリオレ、GT3と続くバージョン拡大の到達点だ。420ps、57kgm、0~100km/h発進加速わずか4.2秒というモンスターには、6MTだけでなく5ATとの組み合わせも可能になるという。現在世界的に流行しているマニュアルモード付きATは、もともとは89年のポルシェティプトロニックが最初であり、それがターボでも選べるようになっていた。



北1ゲートの正面にちょっとオシャレな休憩ゾーン。それぞれのベンチサイドに樹木が植え込まれ、ベンチも赤・青・白とカラフルなシート。まるで公園のよう。ポカポカ陽気に誘われて昼寝をする人も。モーターショーの喧噪も届かず、ここだけは別天地。

Topics ショー見学は履き慣れた靴で 救護所

体調を崩したりする来場者に備えてイベントホールの1階と中央ホールの南側に救護所が設けられている。平日は中央に医師1人、看護婦2人、南に看護婦2人が詰めるが、土・日・祝日は南にもお医者さんが待機するという万全の備え。

毎日40~50人の方々を利用するそうだが、多くはやはり混雑で気分を悪くされた方。持病の薬を忘れた方に救護所の薬を差し上げた例もあるという。幅広い対応で何とも心強い。思った以上に多いのが靴ずれ。おしゃれして新しい靴を履いたためのようで、救護所では「モーターショー見学は是非履き慣れた靴で」と注意を呼びかけている。



来場者に聞く

千葉県佐倉市から来場の黒田清雄さん。1歳児の拓海君を連れてヤングババ。「会場に入って感じたのは音がいくぶん小さくなったこと」とか。「頭にがんが響かなくていいな」とおっしゃる。モーターショーの見学は今回で4回目だそうで、「前は後半、それも遅くなってきたので空いていたように感じたが、今日は結構人が多く感じる。駐車場もなかなか入れなかった」とか。それでも「見物に支障をきたすわけではないので、これからゆっくり見て回りたいが、まずはチャイルドシート」という。そして「コンセプトカーははじめ展示されている次世代車は技術的にも優れていて、それはそれで見応えがあるが、市販車ももっとじっくり味わいたいのでは展示を増やして欲しい。欲張りですかね。」

